

タトニラミ、己ハトテ持タルツエニテ、二打三打打ケレバ、○中無念ニ思ケン事ハ去事ナレ共、餘成ル舉動哉トテ、惡マヌ者ゾナカリケル、

〔甲子夜話 二十八〕男女ノ道ハ人ノ常ナルニ、又タマサカニハ偏氣ヲ受テ生ル、人モ世ニアリ、信州ヲ領セル或侯ノ、婦女ヲ殊更ニ嫌テ、ソノニホヒヲモ厭ト云、夫ユエ奥方モ有レド、對面セラレ迄ニテ、各所ニ離居シ、スベテ女ハ近ヅキ寄セヌコトトゾ、又領邑ニ鯨漁ヲ業トシテ富ル者アリ、婦女嫌ニテ、下女ナド厨下ニ奔走スルノ外身近クニハ女ナシ、然ドモ妻ナキト云テハ、吝嗇ノンシリヲ受トテ、京都又ハ近領富家ノ娘ヲ妻ニ迎フニ、モトヨリ別居シテ、タマサカニ呼見ノミノ體ユエ妻モ倦ハテ、遂ニ別レ去ルトゾ、此類ノ人ハ、天地ノ偏氣ヲ受タルナルベシ、

〔日本書紀 七 景行〕四年二月甲子、天皇幸美濃、○中弟媛欲見其鯉魚遊、而密來臨池、天皇則留而通之、爰弟媛以爲夫婦之道、古今達則也、然於吾而不便、則請天皇曰、妾性不欲交接之道、今不勝皇命之威、暫納惟慕之中、然意所不快、亦形姿穢陋、久之不堪陪於掖庭、唯有妾姊、名曰八坂入媛、容姿麗美、志亦貞潔、宜納後宮、大皇聽之、

〔日本書紀 十五 清寧〕三年七月、飯豐皇女於角刺宮、與夫初交、謂人曰、一知女道、又安可異、終不願交、於男、此詳也、夫、未

〔梧窓漫筆拾遺〕龜田鵬齋の語りし、備前儒士井上嘉膳は、婦女を惡みて一生不犯なり、姉に逢ふにも、一間を隔て、尊敬せり、是れは非常の行なれども、世人好色の戒ともなるべし、婦女を惡みけるは、後梁の先主蕭登に似たり、一生不犯なるは、唐の陽城の兄弟に同じ、

〔隨意錄 五〕男女陰陽之情愛、實是天性、而禽獸亦有之、而我尾張人、岡村雲八者、性惡婦人、衣服飲食、猶婦女之所製、則知其臭、而不欲衣食之、此一奇性、世之所無、然亦有之、南史云、梁王蕭登、尤惡見婦人、相去數步、遙聞其臭、